

金泰生

私の人間地図

青弓社

私の人間地図

金泰生



青弓社

私の人間地図

一九八五年二月二十五日 第二版第一刷発行

金泰生（キム・テセン）

一九二五年、朝鮮・濟州島に生まれる

一九三〇年、渡日

『骨片』（創樹社、一九七七年）

『私の日本地図』（未來社、一九七八年）

定価 一四〇〇円

著者 金泰生

発行者 矢野恵二

発行所 青弓社

東京都千代田区三崎町三―二―一〇

電話（〇三）二六五―八五四八

印刷所 奥田印刷

製本所 昇栄社

©Kim Teseng 0093—850115—4065

目次

序章・離郷譚	5
暮しの中で	14
墓標	57
雑居家族	74
仲間たち	116
希望——何かになりたい	145
別れ——文奎 <small>ムツキ</small>	183
夏の日	203

装画・谷口幸三郎
装订・鈴木 堯

私の人間地図

序章・離郷譚

「そんな危いめをして、わざわざどうして日本へきたの、くにで暮せばよかったのに」

ぼくはその時、そうたずね返していた。無事に着いたから幸いだっただけのもの、船が沈んだら、元も子もないではないか、と――。

母は記憶をたぐりよせるかのように、しばらく遠い眼色になった。子供っぽいぼくの愚かな問いが不満だったのだろう。陽が翳るように表情が曇るとごくり咽喉をならして、何かをのみ下した。

「それやぁ……、どうにかして生きたかったんさ。なんぼ百姓だって、土をなめて命をつなげるわけもないだろ？ ちっぼけなその畑だって、みいんな他人のものなんさ。大きい土地はごっそり日本人がおさえてしまってるだ……。人間どうせ一度は死ぬものだ、その気になれば、と思いきってのことだったよ」

母の離郷譚にはきまわって櫓船の話が出た。母は手こぎの船に身をゆだねて玄海灘をわたった、という。古来、玄海灘は航海の難所とされてきた。古代人にとっては玄海灘を乗りきることが、命をかけ

た事業でさえあった。いくら時代が隔つても海に变りはなく、装備もまんぞくでない櫓船の航海は確かに片道キップの危険をはらんでいたはずだ。

少年のぼくは、母たちの迎ってきた一カ月あまりの航海に少なからず疑問を感じたのだった。玄海灘——荒海という観念にとらわれていたぼくは、母の離郷譚がほとんどなにかの錯覚による夢物語ではないかと、首を傾げさえした。だが、それは決して夢物語などでなかったことは、後日になるにしたがって明瞭になった。

少年期に、日本の社会の底辺で文字を学ぶ世界からまったく疎外された境遇におかれていたぼくは、小学校に〈地理〉という学科があり、〈地理教科書〉のある事実もしらない時期があった。朝鮮と日本との地理上の関係はもとより、その相対的な距離や交通関係にいたってはまったくしるところがなかった。

少年期の初め、大阪で暮したぼくはふるさと人の口からしばしば〈ヘテマド〉という耳なれないことばを聞いた。そのことばを口の上せる時、かれらの声音には、ある親近感を伴ったなつかしそうな響きがこめられていた。さらに、ぼくより数年おくられて大阪へ渡ってきた母方の祖父は、〈ウリ・テマド〉というもっと親密な表現を使って呼ぶことがあった。祖父の表現を日本語に意訳すれば〈おらが対馬島〉ほどの意味になる。ぼくが祖父に、その〈ヘテマド〉は何処にあるのかと問うと、祖父は、それや朝鮮の方にあるんさ、とこともなげに言つてのけたものだ。だから少年期のぼくにとって〈ヘテマド〉のイメージは、わがふるさと人らと共通の心情の延長線上に結ばれたものだった。恰もそれはわが故郷・済州島チユジュドの南方数キロメートルの海上に浮ぶ小島・加波島カハドに似て、ぼくの幼い意識に何らの抵

抗もなく刻みこまれたきわめてのどかなイメージなのだった。

ぼくが対馬を、少くとも対馬に関する知識を書物と地図を通じて理解しはじめるようになるのは、文字の世界へ眼を開いた少年期の終り頃だったが、それはまた朝鮮と日本との地理関係に眼を開くこととも重っていた。しかしそれさえなおかつ、吉田弦二郎の描くところの「島の秋」であったり、湯浅克衛の書く文章の断片によって僅かに組立てられたしごくセンチメンタルなイメージにすぎなかった。だからといって、それらの知識が無用のものだったとはいきれない。ぼくはそれらの文章を通じて、対馬の起伏する山々の谷間にひっそりと炭を焼くわがはらからが数多くいること、さらに対馬の人たちは急病人が出ると船を仕立てて櫓を操り、九州・長崎へではなく、むしろ釜山プッサンの救急病院へ患者を運ぶばあいが多かった事実を知ることができたのだから。

そのようにしてぼくは、かつてわがふるさと人の対馬によせた親近感の根にあるもののいくつかをおぼろげながら理解できた気がした。朝鮮半島の南方洋上によこたわる済州島に属する東方の離島からだ、晴天の視界のよく利く日、遙か東方の水平線上に五島列島のはずれの小さな島影を望むことができる、という。対島は遙か視界のかなたにあっても、求める者に海の道はいつも通じていたようだ。済州島には海女が多く、彼女らは対馬を出稼ぎの場としてひんばんに往来していた。へ島という限られた空間に生を享けた島嶼人としての心情の共通性もあるはずだ。狭小な生活空間の制約がもたらす生活条件の重圧の排除を人々は間々、故郷を脱出することに求めねばならない。

大陸からおしわたって島に吹きつける猛々しい季節風も、梅雨期がすぎると穏やかに凪いだ日和が続きはじめる。梅雨明けから二百十日の前触れが吹きはじめるまでのほぼ二月間が、玄海灘を渡る最

適の季節とされていた。朝鮮半島の南部海岸から北部九州に至るは、ほ二百五十キロの海上には、対馬と壱岐の二つの島をはさんで、朝鮮、対馬、壱岐の三つの海峡がある。朝鮮の南方海域を北上する黒潮は、いわゆる対馬暖流となつて幅五十余キロの朝鮮海峡へ流れこんでいく。――

後に、蕪村の「春の海　ひねもすのたりのたりかな」という句に出会つたとき、ぼくは母の離郷譚がやはり真実であつたことを理解できた気がした。たとえそれは文学的なイメージに触発された理解にすぎないとしても、ぼくには母が確かに蕪村のイメージした春の海に似通つた海を渡つてきたように思えたのだつた。たとえ母の心中がその海のように決してのどかなものではなかつたとしても。

初夏のもっとも海路のおだやかな季節をえらび、十余人の男女を乗せた二丁櫓の船は故郷の海をこぎ出した。潮の流れにのつて航路を北東にとり、朝鮮南部の多島海に点在する島々の沿岸伝いに食料と飲水を補給しながら、一カ月をついやしてやつと対馬の某所に辿りつくことができた。母たちの櫓船の長い航海の末に辿りついた対馬の名も知らない海辺は、遠い砂漠の道を旅してオアシスに行きついた隊商の安堵感をあたえてくれたであろうか。ぼくにはそうとは思えない。暮しの手だてを求めて故郷を離れねばならなかつた人たちにとって、そこはすでに日本であつた。対馬までの海は故郷にながるものであつても、対馬からは明らかに〈異国〉がはじまるのだから。

三・一独立運動の独立万歳ドクトンの声が、朝鮮全土にこだました一九一九年の翌年のことであつた。

「長崎県ナガサキケンというところは、どこにあるのだけ？」

そう問われても、最初、ぼくは母に答えるすべもなかつた。まして対馬が長崎県の行政区域に属す

るといふことに至っては。

飲水や食料も制限されていたから、航海中の咽喉の渇きと空腹をこらえるのも辛かったが、狭い船内では昼間の用便を我慢しなければならぬことが白で体を挽かれるよりも苦しかった、と、母は身震いしていった。なにせ、私はまあだ若かったからねえ——。

「やっと日本に着いて、船を下りた時には、一緒にきた女の人たちの体は、まるで炭みたいに垢だらけだったよ。柿渋で染めた夏物の麻のチョゴリもチマも雑巾みたいに汚れっぱなしでね、船を下りる時に履きかえたわらじだけは揃いのさらだったけれど……、男たちも汚れた木綿のチョゴリの上に朝鮮式のチョッキを着て、下袴ゲジにわらじ履きだったもんさ。道案内の人につれられて、汽車の駅を探している、日本人が足を止めて、たまげたみたいいつまでもじろじろ見つめていたよ」

無謀とさえ思える危険な航海が片道の旅に終らなかつたのは、母にとって幸運というほかなかつた。とはいっても、櫓船を日本まで操ってきた船頭の伴は、日本に着くと下船して案内人に早変わりしたというのだった。船頭の親爺と助手の若者とは二人だけで船を漕ぎかえして行ったという。故郷の島の海に生きる人たちは、古来からの海の往還を知りつくしていたことだけは確かだったようだ。

その船にはぼくの父と何人かの縁者も同行していた。一行はひとまず大阪の知人を頼って行き、母は名古屋や岸和田の紡績工場などで働き、三年後にやっと五十円の貯えをもって父と郷里へ引揚げている。関東大震災のあった一九二三年の冬のことである。

一九一〇年の〈日韓併合〉によって朝鮮を統治下においた日本の支配権力は、土地調査事業に名を

かりて農民から土地を取奪するかたわら、強圧的な武断政治をほしのままにした。一九一九年におこつた三・一民族独立運動は、日本の武断政治を一步後退させて、表面的には文治政治への移行を余儀なくさせたが、民衆の窮乏は深まるばかりであり、生活の手だてを求めて海外へ流亡する朝鮮人同胞はふえる一方だった。ぼくの故郷でも事情は変らなかつた。狭小な耕地しかもたず、それまでの自給自足的な生活に馴れきつてきたぼくの村にも、雑貨をはじめとする日本の商品がどつと流れこみ、前世紀以来の経済基盤は根底からくつがえされていった。

ぼくを身ごもつた母を郷里に残して、父は単身でふたたび日本へ渡つて行った。そして、それ以来まったく音信を絶つてしまった。ぼくの祖父母はすでに世を去つていた。本家を継いだ大伯父も夭折し、その長男であるぼくの従兄夫婦も故郷を出て大阪にいた。村にはまだ伯父を含めてかなりの眷族が残っていたが、人々は誰もが各自の苦しい目前の暮しを打開することに苦慮していた。

母はぼくを生み、四歳まで育てあげたぼくを手放して他家に去つた。母がそのような決意を固めた直接の理由が何であつたのか、幼いぼくには理解のしようがなかつた。ただ、ぼくを伴つて家を出る覚悟であつた母が、伯父に妨げられてやむなく手放したことだけは記憶がある。妻は夫との関係を通じて、眷族全体に従属する存在と信じていた伯父たちは、一族の体面にかけても母からぼくをひき離す必要があつたようだ。いわば、それは母に対する制裁だつたのだ。だからといって、伯父たちにぼくを手塩にかけて育てる余裕もなかつた。父の縁者も、妻子を残して次つぎと日本へ渡つて行く者が相ついでいた。ぼくはやむなく外祖父の手許にひきとられていた。それまで村を離れていた母がふたび村に戻つて世帯をもつことになり、ぼくも一旦は母のもとへ引き取られたが、所詮、母はその家

に属する存在でしかありえなかつた。たとえほくにそそぐべき愛を失つたのではなかつたとしても、すでに母にはほくを受け容れる自由も、その場所もあたえられていなかった。

ほくは、母が妹を生んだ夜の光景をきれぎれに思い出す。母の重苦しい呻き声が暗い家の隅ずみにひろがり、かび臭い土間のかまどに麦わらの黄色をした炎がちらちらと揺れていた。房の片隅で影のようにうずくまっていたほくの小さな体の上を菜種油の燈影に大きくふくれあがった人影が、いくたびもよぎっては再び縮んで遠のいて行つた。重い闇がほくから母を隔て、母は体内からの新しい呼び声の世界へ移つていった。その夜、眠りこけてしまつたほくを抱き上げたのは外祖父だつた。それから数カ月の間は皺ぼんだ汗くさい祖父の胸がほくの臥床だつた。

やもめ暮しの祖父が遠出をして、ほくが独り留守居をしていることがあつた。すると、近所の口さがない女たちがようすを窺いにやってきては、ほくにでたらめな文句を教えこんで座興に歌わせることがあつた。

雨の日も、風の日も、田圃の虚手父ホムテ（かかし）独りぼち、へー、おいらがそんな身の上さ！

ほくのおどけた口調に女たちは身をよじつて笑いこぼれた。飢えた時には木の根をかじり、野良の働きは男にもひけをとらぬ素朴な女たちじめじめした感傷はなかつた。彼女たちの粗野で底抜けに明るい洪笑の渦の中でやはり自分にはもう父母はないのだと、ほくは幼い心に刻みつけた。そのくせほくは小さな道化のように女たちに調子をあわせて笑い声をたてることも忘れない子供だつた。

大阪から帰省した縁者に伴われてほくは日本へ旅たつことがきまつた。夜、ほくは萎びた祖父の胸の中で問いかけていた。

「祖父ちゃん、日本は遠いのか？」

「ああ……、遠い、遠いだ、どげえ背のびしても、向うが見えねえひろおい海を渡ってくだからなあ」
「お正月ぐらい、遠いのか？」

「考げえようじゃあ、お正月よりもっと遠いかもしれんぞ、祖父ちゃんはこの歳まで、五十も六十も正月は見てきちゃあいるが、日本にはまあだいっぺんも出つくわしたことがねえもんなあ——、だがない、怖いことあ何もねえだ。日本には仁淑——おばさんがいるだからな、めっぼう気は強えが思いやりのある娘だったあ。祖父ちゃんの弟の娘っ子なんさ。あれの父親は若けえじぶんコレとかいう恐っそろしい患いで死んじまって、それからおらあがずっと育ててやっただ。おめえを可愛がつてくれべえよ、日本に行っても、じいちゃんのことを忘れるでねえぞ、おふくろを恨むでねえぞ、大人にはみいんなわけがあるもんだからな。そのわけのために大人は苦勞をするだよ。おまえにも、今に大人そのわけが、のみこめるようになるだからなあ……」

祖父は筋張った腕でほくをしっかり抱きしめると、震える声で呟いた。

「歳でも、ねえのに……」

母はほくを大阪行き定期船の寄航する港まで送ってくれた。その夜は港に泊ることになった。明るる朝、船宿で眼を覚ましてみると母の姿はどこにもなかった。枕の横に紙にくるんだ白いメリケン粉のふかしパンが冷たくなってころがっていた。それは、港のような賑やかな町でなければ村ではなかなかありつけない珍しいご馳走なのだ。黒い船虫どもが横着にはいずりまわる荒土を剥き出した壁の向うで、梅雨どきの波がごぼりごぼりと鳴っていた。ほくはごぎ敷の暗い板の間の片隅に体を縮め

てぼんやりと波の弦きを聞いていた。母に黙って去られたさびしさをそぶりにも見せなかった。ぼくは、もうとつくに母と自分が別の世界にいることを知っていたのだから。

暮しの中で

一

大阪までの三日の船旅の間、ぼくは船に酔い、船底の船室で吐きづめに吐きつづけ、大阪港に着いた時はもうふらふらになっていた。それを見かねたものかぼくを伴ってきた容河おじさんは、奮発して円タクに乗せてくれた。勿論、ぼくは同行したおじさんが仁淑おばさんの夫であることも、これから自分がどこへ連れられて行くのかということも、まるでわかりはしなかった。ぐったりして車のなかで時折眼を開いてみると、電車通りの歩道にプラタナスの若葉が風に揺れていた。その時はまだ名さえしらなかった異国の木だったが、その透けるような鮮やかな若葉の色を思い浮かべることができる。

低い家並みの続く通りで、車が止まり、生れてはじめて乗った円タクのステップからぼくが恐る恐る